

---

# 神話のDevilment

Grim Reaper

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神話のDevilm ent

### 【NZード】

NZ6096NZ

### 【作者名】

Grim Reaper

### 【あらすじ】

ある日、黒いコートの青年と少女がイギリス本土を闊歩していた。それが、イギリス……いや、世界を巻き込んだ事件の初奏だと知らずに……。それは神の悪戯なのか。果ては悪魔そのものなのか。

-Scene 1 - 尖塔

ぐるる。

朝から機嫌が悪い天が、一層険しい顔つきで唸つた。  
黒いコートを着た青年はその様子を遙か遠くに感じながらも、祈り続けた。

「本当に神などいるのでしょうか……」  
かたわらの少女が不安げに空を仰いだ。

すると青年はすっと立ち上がり、少女の頭に手を置いた。

「皮肉だな……神によって生かされているのに……」

青年は無表情で憐れみの言葉をかけたが、しかし少女は首を横に振るだけだった。

「私は……悪魔によつて生かされています……」

頭を垂れる少女の首筋に、掘り込まれた紋章が見え隠れした。

「…………ふわあつ！」

男のしなやかな指が、少女の卵がごとく柔肌を伝い、少女の体液をぬぐう。

「我慢しなくていいよ？声をあげても……」「

「だ、だいじょぶです……。お願ひします……」

少女は頬を上気させ、消え入る声で懇願した。

「…………いくよ」

「…………んつーあ……」

そして男は、少女が差し出した優美な脚を持ち上げ、少女の最も敏感な所に口をつけた。

そして少女は大人になつた。

「…………」

酷く冷え切った視線が、青年と少年にぶつけられる。

「どこか問題があるか？」

青年は少女の頭を一度撫で、視線を逆流する。

「あなたの行動全てですよつ！」

「この歩く猥褻物つ！と続く甲高い声に、背に哀愁を漂わせる。

「言つてませんし、漂つてもいません！哀愁なんて！それよりツツ  
コムべきなのは最後ですよ！なんですか、大人つて！」

「一皮むけたじやないか」

「確かにねつ！」

「それにしてもチビル……無事に宿に辿りつけそうだ」

チビルと呼ばれた少女はハツと目を輝かせた。

久しぶりに室内で寝れるかもしないのだ。

「チビルじゃなくてツビルです！……でも、それって、あの女の子  
から？なるほど……」

ああ。と青年は頷いた。

「野宿はもう散々だから、話はつけておいた。それがビリーであろう  
と文句は言えまい」

ツビルは深刻な顔で深く頷いた。

青年は路上に転がっていた杖を拾い上げた。それは遠目で見ても  
異彩を放っている。材質は金属でもなければ木材でもない。

「その前にチャペルに寄りたいが……いいか？」

「あ、相変わらずの偶像崇拜ですね」

「違う。前にこの街に訪れた際、知り合つた司祭に少し確認したい  
ことがある」

端的に弦き、青年はカツカツと歩き出した。

よつと少女を軽々抱きかかえ、ツビルに田で合図する。着いて来  
い。

薄弱とした光がチャペルの尖塔の鐘を輝かせる。

やはり寒いが、その様子は温かさを分散させているようである。

「なんか、不思議な雰囲気を醸し出していますね」

「ああ。俺は初めてじゃないが、その感情は抱いている。名は無いが、いいところであるのは確かだな」

中はとても神秘的な光が、ステンドガラスから降り注いでいた。その延長線上には教壇がひつそりと立っている。と、教壇のすぐ隣のドアが音もなく開いた。出てきたのは、約六十前後の男性だった。

「おお、子爵！ 何年ぶりじやい！」

「タナトスかムーンガルドで結構です。司祭様」

青年は横のツビルを指した。

「こいつは旭川ツビル。東方から来ました」

「ほうほう。東方とな……またこれは珍しい。ふむ、しかし土産話を聞いている暇はないようだ」

司祭はちらつとタナトスを盗み見た。その様子にタナトスは苦笑した。

「本題ですが、なにか分かりましたか？」

「いや……どう思考してみても、祈つてみても神託は聞こえない。

子爵が口にいるのはやはりなにか役目があるといえる。すまんな、何も進歩はなくて」

司祭は頭を下げかけたが、タナトスは手で制した。

「謝るのは俺の方です。時間をとらせてしまつてしまません」

「ほほほお！ 老後の良い楽しみじゃよ。……もう行くのか」

子爵は座らせておいた少女の手をとり、ツビルに手を向けた。

「ああ、やらなくてはならないことがあるからな。またきます」

芯から冷やさうとする風が顔に吹き付ける。近くにある建物にぶつかって、またこちらに標準をかえて襲い掛かった来る。掌に、小刻みに震える小さな手。段々体温を失っていく。

「大丈夫か？ 先ほども言つたが我慢はするな」

少女は上目遣いに子爵を見つめ、愛らしく頷いた。

「しかし、何故この馬車。高いわりに防風対策は出来てないんでしょ  
うか……」

「文句は言つてられまい。乗せてくれるだけありがたいさ」

そういうタナトスの口は、遙か遠くの異郷を見つめているようだ  
った。

虚空に放たれたため息は、ただ白く天に昇るだけであった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6096z/>

---

神話のDevilment

2011年12月20日20時57分発行